

## 2205 離島覚書（宮城県・網地島）



金華山山頂より網地島を望む

令和4年4月25日

### 再訪

前日の田代島に引き続き、9時発の「シーキャット」（網地島ライン<sup>あじ</sup>株）で網地島に向かう。網地島は田代島の南東約3km位置する。また牡鹿半島先端の鮎川は約3kmしか離れていない。定期船は長渡浜<sup>ふたわたせ</sup>を経て、南西に約3km離れた牡鹿半島の鮎川まで行く。周知の通り、鮎川は明治末期に開発された捕鯨の基地として栄えたところであり、現在もIWC脱退後の商業捕鯨の基地として重要な位置を占めている。

網地島に来るのは2度目である。東日本大震災のおよそ1年後の2012（平成10）年2月に震災復興に関する水産庁のアンケート調査で訪れたのだった。

田代島を経て9時54分に網地島の最初の寄港地である網地浜に着いた。ここで5人が下船する。船の運航に合わせて石巻市が運営するマイクロバスが運行されており、1日5便走っている（料金は一律200円）。私以外の5人はバスに乗ったので、1人残された。

網地島は面積6.49km<sup>2</sup>、周囲20.7kmの南北に細長い島で、北部に網地浜、南部に長渡浜という2つの集落が形成されている。島は平坦な台地状の地形で、最も高いところの標高は101mしかない。網地浜と長渡浜は台地上を縦断する道路（県道214号）で結ばれており、バスはこの道路を走る。

網地島は、町村制の施行に伴い1889（明治22）年に牡鹿郡鮎川村の一部として発足した。1940（昭和15）年に鮎川町となり、1955（昭和30）年に大原町と合併して牡鹿町、さらに2005（平成17）年に広域合併によって石巻市に入り、現在に至っている。

網地島では縄文土器や須恵器が出土しており、古くから人が住んでいたことが確認されている。江戸時代には田代島とともに流刑地だったこともある。また伊達政宗によって浪入

田金山が開かれ、金が採掘された時代もあった。

網地島の人口のピークは1955（昭和30）年の3,299人、505戸であった。震災前の2010（平成22）年には426人、246戸に減少していたが、震災を契機に人口流出が加速し、2020（令和2）年には247人、156戸と大幅に減っている。ピーク時に較べると、世帯数は1/3以下、人口は1/10以下になってしまった。網地浜と長渡浜の人口比はおよそ1：3で長渡浜の方が多い。なお、2020年時点の高齢化率は75.3%に達している。後述するように震災前後からIターン者が多く加わるようになってきている。Iターン者は相対的に若い人が多く、高齢化率を引き下げているので、在来島民だけでみた高齢化率はさらに高くなっているに違いない。

### 網地浜

網地浜地区は、定期船が入港する網地漁港（第2種）と小さな半島を隔てたところに整備された池ノ浜漁港（第1種）の2つの漁港を抱える。集落は網地漁港背後の南西部と網地漁港と池ノ浜漁港の間の北東部に大別されるが、2002年に刊行された「牡鹿町誌」によると、南西部の集落は網地、十人前、粟ヶ崎、北東部の集落は髪剃坂、大平、釜ノ間のそれぞれ3つの字で構成される。当時の世帯数は95戸であった。

漁港の中心よりやや南側に突堤が造られ、ここから定期船が発着する。突堤の北側には200mほどの美しい砂浜が続き、網地島屈指の白浜海水浴場が整備されている。

3.11の地震によって漁港は1.5mほど地盤沈下し、波高5mほどの津波が島を通過したので、漁港内にあった漁協出張所、上架施設などの漁業関連施設はすべて大破した。また漁港用地に隣接し低地にあった民家5軒と定置網の従業員宿舎は全損した。民家の中にはマグロ延縄漁業で一世を風靡した辺見家の邸宅も含まれていた。網地浜には遠洋漁業の船主が多かったが、田代島とは対照的に40年ほど前に廃業している。

なお、海抜が低いところにあった北東部の池ノ浜漁港に近いところの集落は空き家だったところを含めて20軒程度の家が床上浸水したため、解体処理されている。

網地浜も後述する長渡浜も津波の被害は限定的であったが、生活インフラは打撃を受けた。海底送水管が破損して断水、約2ヶ月後に復旧した。また海底ケーブルも損傷し、電気も停まる。2週間後に電源車が到着したが、海底ケーブルの復旧は約4ヶ月後になった。

漁港のはずれに「宮城県漁協網地島番屋」と書かれた新しい建物が建っていた。漁港内では誰にも会わなかったが、建物に近づくと70歳前後の男性が建物から出てきた。彼はIターン者で、島で細々と漁業を営んでいるという。そしてこの建物は日本財団による「水産業を中心とした新しいコミュニティ創生のための番屋再生事業」でつくられたものだと教えてくれた。震災前は漁協の網地島出張所が置かれていたが、津波で大破したため、この番屋が出張所代わりになり、地区の漁業者の会合で有効に活用されているとのことだった。

また彼によると、網地浜の住民には100人ほどだが、そのうちIターン者がけっこう多いとのことだ。「ペンション・晴耕雨読」のご主人が現在、網地浜集落の区長をしているので、後で訪ねて聞いたらよいとのアドバイスをいただいた。10年前に網地島を訪れた時の網地浜の区長は在来島民で外航航路の船乗りだった桶谷敦さんであった。当時、ご自宅で歓待されたのだが、6～7前に亡くなられ、「ペンション・晴耕雨読」のご主人に代わったとのこ

とだった。



網地漁港（左）、震災後日本財団の寄付で建てられた番屋（右）

### 神社と別荘

漁港の背後は 10mほどの崖で、そこにつくられた階段を登ると、木村旅館にでた。古い旅館だが、事前に電話したところ誰も出なかったのも、現在は営業していないのだろう。

木村旅館の近くに朱色に塗られた社があった。この神社には県の重要文化財に指定されている木造聖観音像が安置されていると木柱に書かれていた。鎌倉時代の作で、桧の一刀彫、高さが 97.1 cmの大きなものようだ。

熊野神社は元禄年間（1688～1704 年）に紀州の熊野神社よりこの地に勧請したもので、立崎にあった安波大杉神社が荒廃したため、熊野神社に合祀して、1933（昭和 8）年に社殿を新しく造営したという。その当時は牡鹿半島隋一の社殿を誇ったらしい。その後、屋根が傷んだため 1985（昭和 60）年に葺き替え工事が行われているが、その時の記念碑が神社の前に立っていた。

ところで紀州の熊野神社を勧請したのはカツオ漁業の伝播と深く関係していると思われる。イワシなどの小魚をカツオの群れに撒いて、擬餌針をつけた長い竿で一本ずつ釣り上げるカツオ一本釣漁業は、江戸時代前期に早くも紀州の漁師によって関東に伝えられ、漸次北上して福島県のいわき地方に至る。1684（貞享 3）年に弟甚四郎を伴い牡鹿半島の寄磯浜にきた平右衛門は紀州のカツオ一本釣漁法の北上とともに来住した仲買人で、牡鹿半島に同漁業をもたらした。そして網地島を含む牡鹿半島一帯はカツオで潤ったのである。

熊野神社は紀州から来た人たちが故郷に思いを馳せて造ったのか、カツオ漁業の恩恵を受けた地元の人々が造ったのか、証拠はないのではっきりしないが、何れにしてもカツオ漁業と深い関係があるのではないかとというのが私の個人的見解である。

神社から漁港背後の高台の集落を歩く。木々に埋もれて、けっこう立派な家も多い。「なほみ邸」だの「幸恵邸」だの在来島民の屋号とは異なる名前が玄関に掲げられているところを見ると、島外の人が購入したか、借りているものと推定される。付近で誰にも会わなかったので確かめることはできなかったのだが。

集落には、今は使われていない古い井戸の跡や整理された墓石が積み上げられた場所があった。さらにその先に木の上につくられた小さな家、つまり「遊び」用の家も現れた。この一帯では在来島民の生活の趣はほとんど感じられない。





熊野神社（左）、古民家・幸恵邸と書かれた別荘（右）

### 民宿・晴耕雨読

白浜海岸を過ぎた最初の家が「ペンション・晴耕雨読」である。じつは10年前に、ここに泊まっている。宿のご主人は仙台市内で自営業を営んでいたが、網地島が気に入って移住してきたIターン者である。島に来た当初はレストランをやっていたが、古い家が火災にあっても燃えたため、家を新築すると同時にペンションも始めたのだった。娘さんが高校生の時に移住してきたが、その娘さんは島の男性と結婚し、ちょうど出産を控えているところだった。本来ならば「晴耕雨読」に泊まる計画だったが、事前に電話したところ「娘が出産を控えて休業している」と言われたため、泊まることができなかったのである。ちなみに前回泊まった時に食べた自家製ベーコンは絶品だった。

「晴耕雨読」を訪ねると、ご主人が対応してくれた。何か急ぐ用事があるようで、「手短かに済ましてくれ」といわれた。最も関心のあったIターンの動向を聞いた。

現在、網地浜には60戸、95人が住む。このうち島外からの移住者が約1/3を占めるそうだ。そして2/3の在来島民のうち9割が高齢者だという。こうした事情から区長を始めとする地区の役員は全てIターン者が務めている。なお2020年国勢調査時の世帯数は42戸、60人であったから、区長が話していた人数には、別荘などに住み時々やって来る人を含むのだろう。ちなみに直近の住民基本台帳上の世帯数は59戸、人口は76人であった。



ペンション・晴耕雨読（左）、民宿の前に広がる白浜海岸、先に見えるのは田代島（右）

「晴耕雨読」から県道214号を縦断して、長渡浜に向かおうと歩き始めたところで、畑仕事をしている女性と、彼女と話をしている男性に会った。両者とも70歳代と思われる年配

者で、夫婦ではなかった。女性の方は在来島民で、ご主人を亡くし現在は単身生活。自家用野菜を作っているという。男性の方が福島県郡山市からの移住者であった。釣りが好きで、島に旅行に来て気に入り、空き家があるというので1年前に移住したのだそうだ。この2人は網地島が移住者と高齢者の島であることを象徴していよう。

男性によると、縦貫道の台地に出るまでは、かなりきつい坂だという。歩くのは大変だろうとあって、車で送ってくれることになった。じつに親切だ。畑の下が借りている家のように、すぐに車を取りに行き行って乗せてくれた。

## 島の楽校

網地浜と長渡浜を結ぶ県道のほぼ中間あたりに、旧小中学校が置かれていた。両地区の児童・生徒の通学負担が平等になるようにとの配慮からだろう。旧小学校の前のバス停で降りてもらおう。近くのベンチに腰かけて石巻で購入してきたアジフライ弁当を食べた。

網地島には、かつて網地小学校と長渡小学校があった。1918（大正7）年にこの2つの小学校を統合して、両地区のほぼ真ん中に網長尋常高等小学校がつくられた。戦後、鮎川町立網長小学校、さらに牡鹿町立網長小学校と名称を変える。しかし、島に児童がいなくなったため、1997（平成9）年3月に休校となり、さらに3年後の2000（平成12）年3月で閉校になっている。中学校も小学校と同じ年に閉校になった。

閉校となった小学校跡は、1998（平成11）年9月に網小医院として診療所となり、さらに2002（平成14）年6月に医療機関併設型小規模介護老人保健施設に転換し、網地島サービスセンター、網地島高齢者生活福祉センターを併設して、現在に至る。小学校の隣に旧開発総合センターが置かれているが、こちらは現在、診療所になっている。

小学校跡から少し網地浜方面に戻ったところが旧中学校の跡地で、2002（平成14）年から「島の楽校」という学習・研修用の宿泊施設として活用されている。自炊式の宿泊施設で、2階に2段ベッドが並ぶ。主として島外の小中学生を対象とした自然体験学習の場となっている。宿泊定員は50人だが、コロナ禍にあって現在は半数に制限しているという。

炎天下の旧校舎脇で3人の男女が草むしりをしていた。この時期は雑草が勢いを増すので、鎌で根こそぎ切り取り、その後で除草剤を撒くのだそうだ。1人は私と同一歳の男性で神奈川県相模原市出身、中学校卒業と同時に地元の西海工務店に勤め、45年間大工仕事を務めあげた後、15年前に網地島に移住してきた。職場で知り合った奥さんは福島県会津の出身で、一緒に島にやってきた。相模原市は私の住む厚木市の隣の町だから何となく同郷の雰囲気を感じた。島では大工仕事はいつかやめ、こうした手伝いをしながら、准組合員になって魚を獲っているという。まさにのんびりとした老後で、網地島がとっても気に入っているようだ。

もう1人はやはりほぼ同じ世代の女性で、彼女の旦那さんはギンザケの出荷時に出荷作業を手伝うという。30歳代と見受けた若い女性は終始無言であった。

小中学校はなくなったが、現在島には、小学生1人（小3）、中学生2人（何れも中3）、3歳児1人、生まれたての赤子の5人の子供がいる。赤子は上述した「晴耕雨読」の子供で、つい最近生まれた。小3と中3はIターンの子供、中3のもう1人は島の寺の娘で、在来島民の子供は寺の娘だけだ。

島に小中学校がなくなったので、小学生と中学生は、長渡漁港から「シードリーム」というスクールボートで鮎川の小中学校に通っている。スクールボートの所要時間は15分ほどなので、通学はあまり負担にはならないだろう。



島の楽校に衣替えした旧中学校の建物（左）、老人保健施設として活用されている旧小学校（右）

### 根組の集落

「島の楽校」から県道214号を長渡浜に向かって歩き始めると、まもなく脇に軽自動車が進まなくなった。長渡浜の入口まで乗せて行ってくれるという。じつは運転の主は先ほど訪ねた「島の楽校」の校長先生であった。彼はもともとベーリング海などで北洋漁業にたずさわっていた漁船の乗組員で、請われて20年ほど前に校長になったそうだ。

長渡浜の入口で降りて、長渡漁港とは反対側にある根組分港（長渡漁港の分港に相当）に向かう。根組分港の背後の集落は一段高いところにあつたので、津波による被害は全くなかった。ただ、港内の船外機は全て流出し、定置網の番屋も全壊している。地盤沈下した漁港用地は嵩上げ工事が既に終わり、斜路も整備されて、すっかり復旧工事は終わっていた。しかし漁港内には漁船は1隻もなかった。後述するように沖に大型定置網が敷設されているようで、2隻の漁船が網揚げ作業を行っていた。

漁港の入口にベーリング探検隊投錨地と書かれた木柱が建つ。1739（元文5）年にマルティン・スパンペア率いるロシア第2次北太平洋探検隊が、田代島と網地島間の海域に投錨し、8～9日間停泊し、この間、網地島の島民と交流があったという。

ロシアのピョートル大帝は北太平洋から中国・インドに至るルートを発見するために探検隊を組織する。隊長はベーリング海峡の発見者であるデンマーク人のベーリングであった。第1次探検隊に続いて第2次探検隊が派遣されることになり、アメリカ沿岸調査隊、日本分遣隊、シベリア北岸調査隊の3つが編成され、日本分遣隊はシパンベルツが隊長に就任し、①千島列島を南下して日本への航路を発見すること、②日本に到着しその政府と港湾施設を研究し、住民と友好親善し交易を試みること、③カムチャッカに日本人の漂流民がいる場合は日本へ送還し親睦の証とすること、が任務とされた。

日本分遣隊は1739年5月にカムチャッカ半島西岸を4隻の船で出発し、このうちの2隻が1739（元文4）年6月に網地島沖に停泊した。つまりベーリングは日本に来ていない。ところが有名なベーリングにあやかろうとベーリングを冠した木柱が建ち、網地浜地区の白浜には1991年にベーリングの像が建立されている。来てもないベーリングにあやかる



うというもので、史実を知らない人はベーリングが実際に日本に、そして網地島に来たと誤解しかねないのだ。

日本分遣隊が網地島の沖に停泊した時の様子は日本側の史料によると、「異国船に近づき難く引き返し、役人へ報告することにした」と書かれているが、ロシア日本分遣隊の記録には、「6月22日北緯38度23分のある湾に入って投錨。2隻の漁船が漕ぎ寄せて来た。漁民は船上にあがり、食料・日用品を広げたので、織物・ガラス玉・貨幣と物々交換した。」と記載されているという。つまり公式には島民とロシア人との交流はなかったが、実態は違っていたということなのだろう。

根組分港から島の南端まで歩く。東の方角に金華山が横たわっていた。



島を縦断する県道214号（左）、根組分港（右）

## 長渡浜

2005（平成17）年に刊行された牡鹿町誌（中巻）には長渡浜の集落図が載っている。これには189戸の家が記載され、小長渡、長渡、大金、地藏、姥婆、根組、五味尻、船色、渡波滅生の字に分かれている。各字の区分はよくわからないが、根組分港から渡波滅生、船色、根組の各字あたりを巡って坂を登り、北側に向かう。所々に農地があり、自給用の野菜類が作られていた。

網地島の農地は藩政時代から昭和後期まで島の総面積の10～13%ほどで推移し、水田も作られていた。農家人口も農地も長渡浜の方が圧倒的に多かった。というのは、網地浜は昭和期に入りマグロ延縄を中心とする遠洋漁業の船主が数多く生まれ、島民は漁船員として雇用されたが、長渡浜は沿岸漁業が中心だった事情があるのだろう。

農業は主として女の仕事で、男たちは海で働いた。米の他に麦、粟、黍、大豆、野菜類が作られ、戦中、戦後の食糧難の時期には甘藷も作られていた。食糧事情が好転すると、自給的農業から換金農業へと変化する。1966（昭和41）年ごろからソラマメ、山百合などを栽培、1968（昭和43）年には小牛田の渡辺採種場の委託を受けて白菜の種子も作られた。アブラナ科の植物は交雑しやすいため、花粉の飛来が避けられる島という環境は種子づくりには適していたからだ。しかし、1980年代に入ると、これらの農業もそして農地も放棄され、大部分の農地が山林と化して今日に至っている。

網地島はカツオ漁が盛んであったことはすでに述べた。長渡浜にあった八木家はカツオ釣漁業に加え鰹節も生産、アワビを始めとする仲買業も営む有力家であった。この旧家は今

でも残っている。前回長渡浜を訪れた時には前区長の小野喜代男氏がこの旧邸に住んでおり、この屋敷跡で話を聞いた。

島で唯一の郵便局を過ぎ、集落内の坂を下ると長渡漁港のある海に出た。漁港の近くに赤く塗られた鳴雷<sup>なる</sup>神社がある。境内には成田山新勝寺に毎年参詣する講中を設立したことを記念する「成田山」と書かれた石碑が置かれていた。1924（大正13）年9月に建てられたものだ。碑文によると、長渡浜から成田山新勝寺に参詣する講中が1896（明治29）年につくられ、以来毎年4人を派遣してきたという。



長渡の集落（左）、雷神社（右）

### 宮城県漁協網地島支所

13時に長渡漁港にある宮城県漁協網地島支所に顔を出した。同支所の事務所は津波で大破し、震災の1年後に訪れた時は、高台にあった駐在所の建物を仮事務所にしていた。当時、支所長だった阿部敏和さんに話を聞いたが、定年退職を迎えた阿部さんはそのまま嘱託職員として残っておられた。阿部さんを含め現支所長の木村貴秀さんを中心に網地島の漁業の現状について1時間ほど話を伺った。

支所の現在の組合員数は、正57人、准114人の171人。地区別では長渡浜が115人（正40人、准75人）、網地浜が56人（正17人、准39人）という内訳で、長渡浜は網地浜の約2倍の勢力だ。ちなみに正組合員資格は90日となっている。10年前は、正139人、准124人の合計263人だったので、この10年間に100人以上減少している。特に正組合員は82人に及んでいる。

阿部さんによると、いつ引退しようかと迷っていた人が震災を契機に一気にやめて急減、その後は自然減が続き、じり貧の状況にあるという。組合員の多くは若い時に遠洋沖合漁業の乗組員として働き、島に戻って年金生活をしながら趣味と実益を兼ねて漁業を営むいわゆる年金漁師（小漁師）が多かった。しかし200カイリ時代を迎え、マグロ延縄漁業を中心に相次いで撤退したことから、組合員を供給する構図は途絶えてしまった。代わって島外からの移住者やUターンが最近では組合員の供給源となっており、上述したように「島の楽校」でお会いした相模原出身の人もその例にあたる。震災後に組合員にIターンは2人、Uターンは9人で、何れも60歳以上である。なお組合員のうち最も若い人は30歳で、後述するようにギンザケ養殖を営む。また後継者がいる組合員は10人ほどだというから先がおもいやられる。





震災後に建てられた漁協事務所（左）、軽油などの石油類の販売スタンド（右）

網地島で営まれている漁業は、大型定置網と刺網、籠、採貝藻である。後述するように大型定置網漁業は島外の漁業者が実質的に経営しており、網地島の人はいだれも働いていない。なお10年前に伺った時は、19トン型の漁船漁業が1経営体によって営まれていた。

この経営体は乗組員を5～6人抱え、3～4月はイサダを対象とする中層曳網、5月の1ヶ月間はコウナゴ対象の船曳網、6～9月はイカ釣り、10～2月はタラ延縄と多様な漁業を営んでいた。ところが2013年5月に女川漁港に停泊中、機関室から火災を起こし沈没してしまった。配電盤のショートが原因らしい。この漁船には2人の息子も乗り込んでいたが、新しく漁船を建造することなく廃業してしまった。息子の1人は漁師になり、もう1人は牡鹿半島の杉山水産で働いているという。この背景には近年の海洋環境の変化と水産資源の変化、あるいはマーケットの問題があるようだ。網地島周辺では寒流系の魚類が大幅に減少、ブリ類（ワカシやイナダが主体）を中心とする暖流系に魚類が増えている。重要な位置を占めていたサケの漁獲は4～5年前から激減、マダラを対象とするタラ網は単価の下落から操業されていない。

刺網は11経営体が営む（長渡浜：8経営体、網地浜：3経営体）が、震災前の50経営体から大幅に減少している。刺網は網から魚を外すのに家族総出で対応しなければならないほど人手を必要とする。ところが人口減少と高齢化によって人手の確保が難しく、労働力不足が刺網漁業そのものを成り立たなくしているわけだ。漁獲対象は、メバルを中心とする小魚、根魚やカレイ類がメインである。

籠漁業は23経営体が営む（長渡浜：9経営体、網地浜：14経営体）。刺網は上述したように網はずしの労働力が必要なのにに対し、籠は1人でできることから籠漁業に取り組む人の方が多くなっている。籠漁業は延縄1本に20～30籠を吊るし、サバをメインとする餌を入れて、海底に沈め、翌日回収する。漁獲物はマダコとツブ（マツブとシタナガツブの2種類）がメインである。

採貝藻は後述するアワビをメインに、ウニ、ナマコ、ヒジキなどを対象としている。

これら漁船漁業の他に網地島ではギンザケの養殖が営まれている。ギンザケを除いた直近の生産額は880万円であり、アワビの1,350万円を合わせて2,230万円である。漁協が把握していないものを含めても2,500万円には届かなかっただろうという。平成22年度のギンザケの水揚金額は295百万円であったので、網地島の水産業はギンザケ養殖に大きく依存していると言っても過言ではない。なお漁船漁業の水揚額は震災前の1/5ほどに減っ

ている。

## ギンザケ養殖

島外の漁業者に経営を委託している大型定置網を除くと、島の水揚金額の大部分を占めているのがギンザケ養殖である。

網地島におけるギンザケ養殖は、1988～1989年ごろからスタートしている。当初は漁協自営を含めて7経営体が営んでいたが、その後、3経営体（漁協自営を含む）が撤退し、震災前には4経営体に減少していた。

網地島では震災による津波で生簀が破損し、出荷前のギンザケはすべて流失した。しかし翌年には4経営体のうち3経営体が養殖を再開、その後1経営体も復活して、震災前と同様に4経営体が現在ギンザケ養殖を営んでいる。この経営再建にあたっては、水産庁の「がんばる養殖復興支援事業」が活用され、早期の復旧が実現した。

4経営体のうち家族経営が2経営体、残りの2経営体は雇用している。出荷時期は忙しくなるため、経営体あたり5～6人の従業員を島内から雇っているが、人手不足がみだという。「島の楽校」で会った女性の旦那さんが出荷時の選別作業を手伝っていることはすでに述べた。

経営体当たりの生簀数は4基なので、合計16基の生簀が島の東岸中央部付近に置かれている。

ギンザケ養殖は、11月に種苗を導入し、約半年後の4～5月にかけて出荷が始まる。この間、45日に1回ほどの頻度で生簀網を交換する。餌料は全てペレットで、フィード・ワン社（旧日本配合飼料株）のものが使われている。鮎川に営業所があり、漁協の購買事業を通じてギンザケ養殖業者に販売しているようだ。通常の給餌作業は一般的に経営体当たり2人で行われている。

生産されたギンザケの出荷先は、石巻魚市場と女川魚市場に分かれる。また一部は㈱マルイチ産商を通じてイトーヨーカ堂に出荷している。

最近のギンザケの水揚額は、3～4億円で推移しているが、近年は単価が上昇しているので、比較的好調であり、網地島の水産業はギンザケ養殖によってかろうじて支えられている状況なのだ。



生簀の網の修理をする父子（左）、島の東岸中央付近に置かれているギンザケの養殖生簀（右）

## 大型定置網

網地島には定置漁業権が島の西側2ヶ所に設定されている。北部の網を大根網、南部の網を新網と呼ぶ。

ただし、この大型定置網は田代島や江ノ島と同様、県外の漁業者が実質的に経営している。不慣れな漁協自営でやるよりも定置網のプロに任せた方がよいとの判断からだ。現在の経営者は岩手県宮古市に本拠地を置く山根漁業部である。定置漁業権は県漁協網地島支所と同漁業部の共有免許で、漁協には配分金が入る。つまり漁協は経営のリスクがなく、確実に一定の収益が得られる点がメリットになっている。なお山根漁業部は金華山周辺にも2ヶ統の大型定置網を持ち、あわせて4ヶ統を行使している。

山根漁業部の従業員宿舎は網地漁港と根組分港に置かれていたが津波で大破し、現在は鮎川に拠点を移している。従業員は60人弱とのことだ。人手不足のため、従業員は鮎川の宿舎には入らずに石巻から通っている人もいるらしい。

定置網の成績は網による差は大きいものの、山根漁業部は4ヶ統合わせて年間10億円ほどを水揚げしているという。漁獲物はマイワシとサバがメインである。出荷先は石巻魚市場が主体であるが、金華山の網は女川に近いので、女川魚市場に出荷するケースもある。

根組分港からはるか遠くに2隻の漁船が見えた。位置関係からみて新網を揚げているところだった。昼に近かったことから、豊漁で朝と昼の2回水揚げをしているものと推定される。



新網を揚げる2隻の漁船

## アワビ漁と藻場再生

網地島の漁業を特徴づけるのが、アワビとウニ、ヒジキなどの磯根資源である。比較的広い磯根漁場に恵まれた網地島にとって、江戸時代からアワビは重要な現金収入源であった。

ところがアワビの漁法は同じ島なのに網地浜と長渡浜で異なっている。網地浜は箱眼鏡を使って船上から海底を覗き、鉤で使って獲るいわゆる「見突き」と呼ばれる方法でアワビを獲るが、長渡浜ではウェットスーツを着用して素潜りで獲ることが認められている。後者の方法は効率がよく、いわゆる海士漁業に相当する。

さらにアワビの漁期は宮城県下では通常、11～2月の4ヶ月間であるが、素潜りの場合は特別に6～7月の2ヶ月間の操業を認めている。冬の海を素潜りで潜るのは体に堪えるからなのだ。

このように同じ島であるにもかかわらず、漁法や漁期が地区で異なるのはなぜなのか。じつはこの背景には長い歴史が引き継がれている。

江戸幕府は元禄年間より対中国貿易の主要な交易品として乾鮑、干しナマコ、コンブ、フカヒレ、スルメなどのいわゆる「長崎俵物」の輸出に力を入れていた。長渡浜はアワビの主



産地であったことからアワビ獲りがさかんであった。この輸出用のアワビを供給したのが長渡浜であった。ところで牡鹿町誌によると、網地浜と長渡浜との間では、海山の境界を巡る紛争があったようで、1693（元禄6）年に和解し、長渡浜が地先権を独占的に増やすことになったようだ。

当時、西日本では海士や海女が潜ってアワビを獲るのが一般的で、しかもこちらの方が効率的だったことから、幕府の長崎俵物の集荷を引き受けた長崎商人は集荷の実績をあげるために潜りの技術者を伴って現地に潜りの技術を伝えたものと考えられる。それが地域に定着し、その技術が脈々と受け継がれ、そして漁業制度もそのまま温存されてきたと考えられるのである。

現在、アワビを獲る組合員は網地浜と長渡浜を合わせて50人前後である。震災の翌年はアワビの漁獲を控えたが、その後は継続して漁獲が続けられている。この間の豊凶変動は比較的大きいといわれているが、2021年度の水揚額は1,350万円で平年並みであった。

ただ近年、西日本各地で進行中の磯焼けほどではないものの、網地島でもアワビの餌である大型海藻が減少しているらしい。このため3年前から海藻への摂餌圧を減らすべくウニの駆除活動が実施されており、さらにアラメを増やすために人工的に生産した種苗を用いた藻場造成の試験に昨年11月から取り組んでいる。この活動は水産庁の水産多面的機能の事業を活用したものだ。

ウニの漁期は6～7月である。アワビは漁協の共販で販売しているが、ウニは漁業者個人がむき身に加工して販売している。また、採藻の対象はヒジキとフノリで、メインはヒジキだが、漁期は4月で、自らボイル、乾燥して個人で販売しているようだ。

遠洋漁業や商船の乗組員として働き、老後は島に戻って、沿岸漁業を支えた社会システムは絶たれて久しい。現在は辛うじてギンザケ養殖が網地島の水産業を支えているが、四方を海に囲まれ、漁業の伝統を有する網地島の将来は厳しい。網地島の風土に魅力を感じ、Iターンを希望する人はそれなりにいるから、こうした希望者を沿岸漁業や養殖業の担い手として育てていかなければやがて網地島は無人島になってしまうかもしれない。

10年前に来た時には、網地浜の「晴耕雨読」、長渡浜の「大国屋旅館」に泊まった。しかし前者は上述した理由で、後者は経営者が高齢化しているため、客を受け入れていなかった。観光パンフレットに載っている他のいくつかの宿泊施設もすでにやめていたり、コロナの影響で客の受け入れをしていなかったりして、島に泊まる場所は皆無だった。

したがって、日帰りしなければならぬ。島の滞在時間をもう少し確保しようとするならば、16時38分発の「シーキャット」で鮎川に出ることもできるが、鮎川から石巻に行くバスはこの時点ですでにないから、結局タクシーで石巻まで戻らなければならない。しかもこの日の夜、同級生の八興漁業社長の阿部達男君と会うことになっていた。結局、14時51分発の最終便（マーメイドⅡ）で石巻に戻った。

#### 【文献】

- 牡鹿町誌編纂委員会（1984）：牡鹿町誌 上巻。牡鹿町。  
牡鹿町誌編纂委員会（2002）：牡鹿町誌 下巻。牡鹿町。  
牡鹿町誌編纂委員会（2005）：牡鹿町誌 中巻。牡鹿町。